

<b>3.7</b> [木]	第620回 名曲シリーズ サントリーホール/19時開演 Popular Series, No. 620 Thursday, 7th March, 19:00 / Suntory Hall
<b>3.9</b> [土]	第110回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ 横浜みなとみらいホール/14時開演 Yokohama Minato Mirai Holiday Popular Series, No. 110 Saturday, 9th March, 14:00 / Yokohama Minato Mirai Hall

**指揮／シルヴァン・カンブルラン** (常任指揮者) ..... **P.6**  
Principal Conductor SYLVAIN CAMBRELING

**フルート／サラ・ルヴィオン** Flute SARAH LOUVION ..... **P.7**

**コンサートマスター／長原幸太** Concertmaster KOTA NAGAHARA

**イベール 寄港地** [約14分] ..... **P.11**  
**IBERT / Escales**  
I. ローマーバレルモ  
II. チュニスーネフタ  
III. バレンシア

**イベール フルート協奏曲** [約18分] ..... **P.12**  
**IBERT / Flute Concerto**  
I. Allegro  
II. Andante  
III. Allegro scherzando

[休憩 Intermission]

**ドビュッシー (ツェンダー編) 前奏曲集** (日本初演) [約18分] ..... **P.13**  
**DEBUSSY (arr. ZENDER) / 5 Préludes**  
I. 帆  
II. パックの踊り  
III. 風変わりなラヴィーナ將軍  
IV. 雪の上の足跡  
V. アナカプリの丘

**ドビュッシー 交響詩〈海〉** [約23分] ..... **P.14**  
**DEBUSSY / La mer**  
I. 海の夜明けから真昼まで  
II. 波の戯れ  
III. 風と海との対話

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団  
[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)  
独立行政法人日本芸術文化振興会  
[協力] 横浜みなとみらいホール (3/9)



<b>3.14</b> [木]	第586回 定期演奏会 サントリーホール/19時開演 Subscription Concert, No. 586 Thursday, 14th March, 19:00 / Suntory Hall
-----------------	--

**指揮／シルヴァン・カンブルラン** (常任指揮者) ..... **P.6**  
Principal Conductor SYLVAIN CAMBRELING

**ヴァルデマル／ロバート・ディーン・スミス** (テノール) ..... **P.7**  
Waldemar ROBERT DEAN SMITH

**トーヴェ／レイチェル・ニコルズ** (ソプラノ) Tove RACHEL NICHOLLS ..... **P.8**

**森鳩／クラウディア・マーンケ** (メゾ・ソプラノ) Waldtaube CLAUDIA MAHNKE ..... **P.8**

**農夫・語り／ディートリヒ・ヘンシエル** (バリトン) ..... **P.9**  
Bauer & Sprecher DIETRICH HENSCHEL

**道化師クラウス／ユルゲン・ザッヒャー** (テノール) Klaus Narr JÜRGEN SACHER ..... **P.9**

**合唱／新国立劇場合唱団** Chorus NEW NATIONAL THEATRE CHORUS ..... **P.10**

**合唱指揮／三澤洋史** Chorusmaster HIROFUMI MISAWA

**コンサートマスター／小森谷巧** Concertmaster TAKUMI KOMORIYA  
※当初発表時から出演者が一部変更されました。

**シェーンベルク グレの歌** (字幕付き) [約110分] ..... **P.15**  
**SCHÖNBERG / Gurre-Lieder**

**第1部** 序奏－今 黄昏に海も陸も－月の光が淀みなくそそぎ－馬よなぜこうも遅い！－星は喜びの声をあげ輝く海は－天使たちの舞も－今初めて告げる－真夜中だ－あなたは私に愛の眼差しを向け－不思議なトーヴェよ－間奏－森鳩の声：グレの鳩たちよ

**第2部** 神よ何をなさったかご存じか？

[休憩 Intermission]

**第3部** 荒々しい狩：目覚めよヴァルデマル王の臣下たちよ－棺の蓋が音を立てて跳ね上がる－王よグレの岸辺によろこせ！－森はトーヴェの声で囁き－奇妙な水中の鳥の正体はウナギ－天の厳格な裁き手よ－雄鳥が頭をもたげ今にも朝を告げようとしている－夏風の荒々しい狩：序奏－アカザ氏にハタザオ夫人よ－見よ太陽を！

字幕：岩下久美子 字幕操作：Zimaku プラス

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団  
[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)  
独立行政法人日本芸術文化振興会  
公益財団法人アフィニス文化財団



「音楽文化の担い手としてのプロ・オーケストラが主催する、わが国ならびに各楽団が活動の重点を置いている地域にとって意義がある企画」として選ばれました。

[協力] **アフラック**

※本公演では日本テレビ「読響シンフォニックライブ」の収録が行われます。

3.19 [火]

読響アンサンブル・シリーズ 特別演奏会  
カンブルラン指揮「果てなき音楽の旅」 紀尾井ホール/19時開演  
Yomikyo Ensemble Series, Special Concert  
Tuesday, 19th March, 19:00 / Kioi Hall

指揮／シルヴァン・カンブルラン (常任指揮者)

Principal Conductor SYLVAIN CAMBRELING ..... P.6

ピアノ／ピエール＝ロラン・エマール Piano PIERRE-LAURENT AIMARD ..... P.10

コンサートマスター／小森谷巧 Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

ヴァレーズ オクタンドル [約7分] ..... P.19

VARÈSE / Octandre

- I. Assez lent -
- II. Très vif et nerveux -
- III. Grave - Animé et jubilatoire

メシアン 7つの俳諧 [約23分] ..... P.20

MESSIAEN / Sept haïkaï

- I. 導入部
- II. 奈良公園と石灯籠
- III. 山中湖 - カデンツァ
- IV. 雅楽
- V. 宮島と海中の鳥居
- VI. 軽井沢の鳥たち
- VII. コーダ

[休憩 Intermission]

シェルシ 4つの小品 [約18分] ..... P.21

SCELSI / Quattro Pezzi

グリゼー 〈音響空間〉から“パルシエル” [約18分] ..... P.22

GRISEY / “Partiels” from Les espaces acoustiques

文化庁委託事業「平成30年度 戦略的芸術文化創造推進事業」  
[主催] 文化庁、読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団



3.23 [土]

第215回 土曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール/14時開演  
Saturday Matinée Series, No. 215  
Saturday, 23rd March, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

3.24 [日]

第215回 日曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール/14時開演  
Sunday Matinée Series, No. 215  
Sunday, 24th March, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮／シルヴァン・カンブルラン (常任指揮者)

Principal Conductor SYLVAIN CAMBRELING ..... P.6

ピアノ／ピエール＝ロラン・エマール Piano PIERRE-LAURENT AIMARD ..... P.10

コンサートマスター／長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

ベルリオーズ 歌劇〈ベアトリスとベネディクト〉序曲 [約8分] ..... P.23

BERLIOZ / “Béatrice et Bénédict” Overture

ベートーヴェン ピアノ協奏曲 第3番 ハ短調 作品37 [約34分] ..... P.24

BEETHOVEN / Piano Concerto No. 3 in C minor, op. 37

- I. Allegro con brio
- II. Largo
- III. Rondo : Allegro

[休憩 Intermission]

ベルリオーズ 幻想交響曲 作品14 [約49分] ..... P.25

BERLIOZ / Symphonic fantastique, op. 14

- I. 夢と情熱
- II. 舞踏会
- III. 野の情景
- IV. 断頭台への行進
- V. ワルプルギスの夜の夢

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

[共催] 東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）

[協賛] NTTコミュニケーションズ株式会社（3/24）

[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）  
独立行政法人日本芸術文化振興会



# シルヴァン・カンブルラン

(常任指揮者)  
Sylvain Cambreling

“色彩の魔術師”  
9年間の集大成

2010年の常任指揮者就任以来、数々の名演を生み出してきたマエストロが、いよいよ退任のときを迎える。ラストは得意のフランス音楽や近現代作品を取り上げ、輝かしいサウンドで有終の美を飾るだろう。

1948年フランス・アミアン生まれ。これまでブリュッセルのベルギー王立モネ歌劇場とフランクフルト歌劇場の音楽監督、バーデンバーデン&フライブルクSWR(南西ドイツ放送)響の首席指揮者、シュトゥットガルト歌劇場の音楽総監督を歴任した。現在は2018年秋に就任したハンブルク響の首席指揮者の任にあるほか、クラングフォーラム・ウィーン的首席客演指揮者、ドイツ・マイントツのヨハネス・ゲーテンベルク大学で指揮科の招聘教授も務めている。

客演指揮者としてはウィーン・フィル、ベルリン・フィルをはじめとする欧米の



一流楽団と共演しており、オペラ指揮者としてもザルツブルク音楽祭、メトロポリタン歌劇場、パリ・オペラ座などに数多く出演している。

17年11月には読響とメシアン〈アッシジの聖フランチェスコ〉を披露し、『音楽の友』誌の「コンサート・ベストテン2017」で第1位に選出されるなど絶賛された。19年3月末で読響常任指揮者を退任し、4月から桂冠指揮者となる。

- ◇ 3月7日 名曲シリーズ
- ◇ 3月9日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
- ◇ 3月14日 定期演奏会
- ◇ 3月19日 読響アンサンブル・シリーズ 特別演奏会
- ◇ 3月23日 土曜マチネーシリーズ
- ◇ 3月24日 日曜マチネーシリーズ



©Christine Schneider

# フルート サラ・ルヴィオン

Flute Sarah Louvion

フランス北部生まれ。パリ国立高等音楽院で最優秀賞を得て卒業。神戸国際フルート・コンクール第1位、ジュネーヴ国際コンクール第3位など受賞多数。2002年からフランクフルト歌劇場管の首席フルート奏者を務め、ソリストとしてフランクフルト歌劇場管、リール国立管、トゥールーズ国立室内管、アムステルダム室内管、モスクワ室内管などと共演。カンヌのMIDEM、プラード音楽祭、コルマール国際音楽祭に招かれるなど国際的に活躍。ファラオ・レーベルなどからCDを多数リリース。読響初登場。

- ◇ 3月7日 名曲シリーズ
- ◇ 3月9日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ



©www.photopulse.ch

# ヴァルデマル ロバート・ディーン・スミス

Waldemar Robert Dean Smith

アメリカ出身。ジュリアード音楽院を経てヨーロッパで研鑽を積む。1997年〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉ヴァルターを歌い、バイロイト音楽祭で鮮烈なデビューを飾った。ウィーン国立歌劇場、バイエルン国立歌劇場、ミラノ・スカラ座、メトロポリタン歌劇場など世界中の名門歌劇場で活躍を続け、世界的ヘルデン・テノールとして名を馳せている。メータ、パッパーノ、ティーレマン、ムーティ、バレンボイムらの指揮で、バイエルン放送響、ロイヤル・コンサートヘボウ管、ロンドン響などと多数共演。

- ◇ 3月14日 定期演奏会



©Clive Barda

## トーヴェ レイチェル・ニコルズ

Tove Rachel Nicholls

イギリス生まれ。英国ロイヤル・オペラにデビューした後、エジンバラ音楽祭、BBCプロムスなどで活躍。2015年には〈トリスタンとイゾルデ〉でカンブルラン／読響と共演、イゾルデ役を歌い絶賛された。近年は〈エレクトラ〉のタイトルロールでも成功を取っている。これまでにゲルギエフ、コリン・デイヴィス、ガーディナー、ノリントン、ラトル、鈴木雅明ら巨匠の指揮で、ロンドン・フィル、バーミンガム市響、エイジ・オブ・エンライトメント管、ロイヤル・フィル、BBC響などと共演。宗教曲でも活躍している。

◇3月14日 定期演奏会



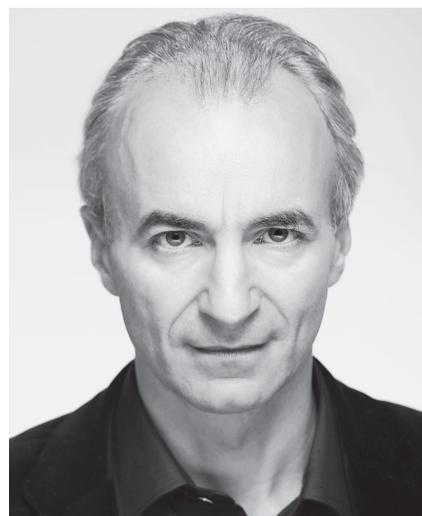
©Monika Rittershaus

## 森鳩 クラウディア・マーンケ

Waldbaue Claudia Mahnke

ドイツ生まれ。ドレスデン音楽大学で学び、1996年から2006年までシュトゥットガルト歌劇場に所属した。05年ミュンヘン・オペラ音楽祭の開幕公演で注目を集め、06年からフランクフルト歌劇場の専属歌手を務めている。13年には〈ラインの黄金〉〈ワルキューレ〉でフリッカほかを歌ってパイロイト音楽祭にデビュー。ベルリン国立歌劇場、バイエルン国立歌劇場、ドレスデン国立歌劇場などでも活躍。読響とは15年にカンブルラン指揮〈トリスタンとイゾルデ〉ブランゲーネ役で共演し、好評を博した。

◇3月14日 定期演奏会



©Susanne Diesner

## 農夫・語り デイトリヒ・ヘンシェル

Bauer & Sprecher Dietrich Henschel

ドイツ・ベルリン生まれ。1990年フーゴー・ヴォルフ・コンクール入賞。リヨン歌劇場、ベルリン・ドイツ・オペラで国際的キャリアを開始。ザルツブルク音楽祭、エクサン・プロヴァンス音楽祭などに出演。これまでにアーノンクール、ガーディナー、ナガノ、メータ、ラトル、ティーレマンらと共演。モンテヴェルデイやモーツァルトから現代作品まで幅広いレパートリーを誇る。昨年6月にはハンブルグ歌劇場でルジツカの新作〈ベンヤミン〉のタイトルロールを歌い、絶賛された。読響とは2003年の欧州公演（アルブレヒト指揮）で共演。

◇3月14日 定期演奏会



©Jürgen Sacher

## 道化師クラウス ユルゲン・ザッヒャー

Klaus Narr Jürgen Sacher

ドイツ・アウクスブルク生まれ。1991年からハンブルク国立歌劇場の専属歌手を務めている。ベルリン国立歌劇場、ミラノ・スカラ座、ウィーン国立歌劇場、ザルツブルク音楽祭など世界各地で活躍しており、〈ジークフリート〉ミーメ、〈サロメ〉ヘロデなどで高い評価を得ている。その他〈魔笛〉〈パルジファル〉〈ナクソス島のアリアドネ〉〈エレクトラ〉〈ルル〉などに多数出演。これまでにアバド、シュタイン、ティーレマン、バレンボイム、K. ベトレンコら一流指揮者と共演している。

◇3月14日 定期演奏会

3.7 [木]

3.9 [土]

飯尾洋一 (いおい よういち)・音楽ライター

イベール  
寄港地

作曲：1922年／初演：1924年1月6日、パリ／演奏時間：約14分

パリ音楽院で学んでいたジャック・イベール(1890～1962)は、在学中に第一次世界大戦がはじまると、志願して海軍士官として従軍する。1919年、イベールは大戦後最初のローマ賞受賞者となる。軍事勲章であるクロワ・ド・ゲール勲章とレジオン・ドヌール勲章を獲得したイベールは、受章式に将校の制服であらわれたという。

ローマ賞を得てローマに留学したイベールは、地中海地方から受けた鮮やかな印象と海軍士官時代の経験をもとに、ここで〈寄港地〉の作曲に取り組む。ポール・パレー指揮ラムルー管弦楽団による初演は大成功を収め、作曲者の名を一躍知らしめることとなった。

曲は三つの部分からなる。出版社の勧めにより、それぞれに題が添えられた。

第1曲“ローマパレルモ”フルートのソロとかすかな弦楽合奏が、夜明けの海を連想させる。やがて日が昇り、陽気なダンスが始まり、人々の喧騒が描かれる。ふたたび海に静けさが戻り、消え入るように曲を閉じる。光きらめく広大な海は、先人ドビュッシーへのリスペクトか。

第2曲“チュニスーネフタ”4分の4拍子と4分の3拍子を交替させ、オーボエがアフリカ風のエキゾチックな主題を奏でる。これはネフタ近くの砂漠でイベールが実際に耳にした旋律に基づくという。執拗な<sup>しつよう</sup>反復は後のラヴェールの〈ボレロ〉を思わせる。

第3曲“バレンシア”スペイン舞曲セギディーリャのリズムで、活発な港町の情景が生き生きと描かれる。

楽器編成／フルート2(ピッコロ持替)、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット3、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、シンバル、トライアングル、フィールド・ドラム、タンブリン、カステネット、シロフォン、銅鑼)、ハープ2、チェレスタ、弦五部



©Marco Borggreve

## ピアノ ピエール＝ロラン・エマール

Piano Pierre-Laurent Aimard

1957年フランス・リヨン生まれ。メシアン国際コンクール優勝。10代でアンサンブル・アンテルコンタンポランの専属ピアニストに抜擢された。カーター、リゲティ、クルタークらの作曲家と密接な関係を築いている。これまでにラトル、サロネン、ナガノらの指揮で、ベルリン・フィル、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、ロンドン響、シカゴ響などと共演。2008年から16年までオールドバラ音楽祭の芸術監督を務めた。ワーナー、グラモフォン、ペンタトーンなどと数多くの録音を行い、国際的な賞を多数受賞。

- ◇ 3月19日 読響アンサンブル・シリーズ 特別演奏会
- ◇ 3月23日 土曜マチネーシリーズ
- ◇ 3月24日 日曜マチネーシリーズ

## 合唱 新国立劇場合唱団

Chorus New National Theatre Chorus

## 合唱指揮 三澤洋史

Chorusmaster Hirofumi Misawa

1997年にオープンした新国立劇場で、オペラ公演のための合唱団として活動を開始。現在、メンバーは100名を超え、新国立劇場の多彩な演目によりレパートリーを増やしつつある。高水準の歌唱力と演技力を有し、公演ごとに共演する出演者、指揮者、演出家から高い評価を得ている。読響とは2007年以降、年末の〈第九〉公演をはじめ数多く共演している。特にラヴェル〈ダフニスとクロエ〉、ストラヴィンスキー〈詩篇交響曲〉、メシアン〈アッシジの聖フランチェスコ〉では見事な歌唱を披露し、絶賛を博した。

- ◇ 3月14日 定期演奏会

# イベール フルート協奏曲

作曲：1932～33年／初演：1934年2月24日、パリ／演奏時間：約18分

〈寄港地〉と並ぶイベールの代表作が、このフルート協奏曲である。名フルート奏者、マルセル・モイーズのために作曲された。

〈寄港地〉を作曲した時点では新進作曲家だったが、それから10年余を経て、イベールは40代を迎えていた。「私は自由でありたい。作曲家を伝統主義者と前衛信奉者とに大別してしまうような偏見とは無縁でいたい」と語るイベールは、ますます自在の作風を身につけて、3楽章形式による古典的な協奏曲の容れ物に、軽快でウィットに富んだ楽想を盛り込んで、独自のスタイルによる協奏曲の名作を書き上げることに成功した。

初演の日、イベールはマルセイユのホテルに滞在していた。パリの初演の様子がラジオの生放送で流れると、イベールは大いに満足して作品に聴き入っていたという。その際、彼は新聞記者の取材に「私はいつも旅が好きでした。もし音楽家にならなかつたら、きっと船員になっていたでしょうね」と答えている。ドビュッシーもほとんど同じことを語っているのは、奇妙な偶

然というほかない。

**第1楽章** 華やかなショウの開幕を告げるような短い序奏に続いて、すぐに独奏フルートが目まぐるしく飛び回る。リズムカルな楽想がくりひろげられ、ほとんど休みになしに独奏フルートが活躍する。

**第2楽章** 弱音器付きのひそやかな弦楽合奏に、独奏フルートの寂寞とした主題が続く。いっそうの情感を込めながら、次第に曲は高潮する。後半では独奏フルートにヴァイオリン・ソロが絡み合う。後のラヴェルのピアノ協奏曲の第2楽章を先取りするような清冽なりリズムを漂わせる。

**第3楽章** 4拍子と3拍子を交替させながら、総奏による3回の強打にホルンの三連符が応答するというユーモラスなオープニング。強風に煽られるように独奏フルートが舞い上がる。華麗なソロはにぎやかなパーティーの主役のような。中間部でいったん曲が静まり内省的な表情を見せるも、すぐに澀刺とした楽想が戻ってくる。終結部の前には定型通りにソロの技巧的なカデンツァが置かれ、上機嫌で曲を閉じる。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット、ティンパニ、弦五部、独奏フルート

# ドビュッシー（ツェンダー編） 前奏曲集（日本初演）

作曲：1909～13年（原曲）、1991/1997年（編曲）／初演：1991年11月24日、フランクフルト／演奏時間：約18分

1909年から10年にかけて、クロード・ドビュッシー（1862～1918）はピアノ独奏用に全12曲からなる前奏曲集第1巻を作曲した。続いて1910年から13年にかけてさらに12曲の前奏曲を作曲し、これを前奏曲集第2巻として発表した。ショパンの前例にならって、ドビュッシーも全24曲の前奏曲を書き上げることとなった。

ドビュッシーにとって、自作のピアノ曲をオーケストラ用に編曲することは決して魅力的な仕事ではなかったのだろう。同時代のフランスの作曲家ラヴェルの少なからぬ作品が、ピアノ曲としてもオーケストラ曲としても演奏されるのとは対照的である。しかし、色彩豊かなドビュッシーのピアノ曲を管弦楽用に編曲するというアイデアは、多くの作曲家たちを魅了してきた。たとえば前奏曲集については、現代イギリスの作曲家コリン・マッシュューズや、スロヴァキアの才人アレンジャー、ピーター・ブレイナーが、オーケストラ編曲版を発表している。

マッシュューズとブレイナーが前奏曲集全曲をアレンジしたのに対して、ドイツの

作曲家・指揮者であるハンス・ツェンダー（1936～）は、5曲のみを選んでオーケストラレーションを施した。曲順も原曲とは一部前後しており、第1集から第2曲“帆”、同第11曲“バックの踊り”、第2集の第6曲“風変わりなラヴィーンス將軍”、第1集の第6曲“雪の上の足跡”、同第5曲“アナカプリの丘”という配列になっている。シューベルトの歌曲集《冬の旅》における創造的な編曲で知られるツェンダーだが、ここでは原曲の骨格を残したまま、多彩な楽器法を駆使して、モノトーンの原曲を色鮮やかな管弦楽曲へと変身させている。“帆”気まぐれな風に帆がたなびく。“バックの踊り”シェイクスピアの『夏の夜の夢』に登場するいたずら好きの妖精バックが飛び回る。“風変わりなラヴィーンス將軍”実在の道化芸人が題材。操り人形のような動きによるぎこちないダンス。“雪の上の足跡”寂しげな雪景色が広がる。“アナカプリの丘”アナカプリはナポリ湾のカプリ島の街。南国的な明るさと開放感にあふれる。

楽器編成／フルート2（ピッコロ、アルトフルート持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2（バスクラリネット持替）、ファゴット、コントラファゴット、ホルン、トランペット、トロンボーン、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、スリットドラム、シンバル、サスペンデッド・シンバル、クロテイル、トライアングル、ウッドブロック、木魚、トムトム、ピストル、ラチェット、ミュージカルソー、シロリンバ、グロックンシュピール、銅鑼、ゴング）、ハーブ、スライドホイッスル、メロディカ、弦五部

## ドビュッシー 交響詩〈海〉

作曲：1903年～05年／初演：1905年10月15日、パリ／演奏時間：約23分

クロード・ドビュッシーもまた、イベールと同様に海への憧憬を音楽で表現した作曲家だった。彼も「音楽家にならなければ船乗りになったであろう」と語ったことがある。光と影、水と波、風と大気。自然が作り出す形なき現象を、ドビュッシーは巧みに音で表現してきた。そんな作曲家にとって、海は格好の題材となる。水面がきらめき、風が吹き、波しぶきがあがる。時々刻々と移りゆく光と水と大気の様相が、精妙な音のドラマとして再現される。

1903年夏、ドビュッシーは妻の実家ビシャンに滞在し、〈海〉の作曲に着手する。当初、作曲は順調に進むように思えたが、ドビュッシーとエンマ・バルダックとの不倫、妻リリーのピストル自殺未遂騒動といった私生活上のスキヤンダルの影響もあって、作品の完成は1905年3月まで遅れた。7月に楽譜が出版され、表紙には葛飾北斎の富嶽三十六景「神奈川沖浪裏」がデザインされた。

同年10月、カミーユ・シュヴィヤール指揮ラムルー管弦楽団によって初演

が行われたが、批評は決して芳しくはなかった。「とげとげしく不快な響き」「理解不可能」といった評は作品の先進性のあらわれともいえるが、なかには「海を感じない」という評も。はたしてこの曲を初めて聴いて「海」を感じられるかどうかというのは興味深い問いだろう。作品がすっかり名曲として定着した今、私たちは事後的にこの曲から海らしさの表現を学んでいるかもしれないのだから。

**第1部**“海の夜明けから真昼まで” 暁を思わず神秘的な導入から、一閃するようなトランペットとイングリッシュ・ホルンの主題が立ち上り、弦楽器の細かな動きが揺れるような海面を連想させる。太陽が昇り、大海原が光り輝く。  
**第2部**“波の戯れ” 予測不能な波の動きを模倣するかのよう木管楽器群が絡み合い、高音のトリルを伴ったヴァイオリンの動機、ハーブのグリッサンドなどが次々と加わる。

**第3部**“風と海との対話” 風が吹き始め、海が呼応する。緊迫感を高め、やがて荒々しい嵐が到来する。最後は輝かしい全強奏で曲を閉じる。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、コルネット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（グロッケンシュピール、銅鑼、シンバル、トライアングル、太鼓）、ハーブ2、チェレスタ、弦五部

3.14 [木]

柴辻純子 (しばつじ じゅんこ)・音楽評論家

## シェーンベルク グレの歌

作曲：1900年～03年、1910年7月～11年11月7日／初演：1913年2月23日、ウィーン／演奏時間：約110分

### ● あらすじ ●

デンマークの詩人・小説家のイェンス・ペーター・ヤコブセン（1847～85）の手による「グレの歌」は、デンマークの中世の伝説に基づく。登場人物や物語は、誰もが知っているという前提で書かれているため、詳細は述べられず暗示にとどめられているところも少なくない（トーヴェの死も、森鳩によって伝えられる）。ヤコブセンの詩は、九つの部分から構成されるが、アルノルト・シェーンベルク（1874～1951）は、それを長さも内容も異なる三つの部分に分け、最後に“夏風の荒々しい狩”と題した終結部を置いた。

**第1部**：中世デンマークの王ヴァルデマル I 世（在位1157～82）は馬を駆り、グレの地にある狩猟用の城に向かう。ヴァルデマルはこの城で、侍従の娘トーヴェと許されぬまま幸福な愛の生活を送っている。黄昏が訪れ、静寂が森を<sup>たそがれ</sup>つつむとヴァルデマルの心は安らぎ、トーヴェも静かに輝く月光のもとで、

夜の美しさやはかなさを思う。二人は愛の喜びを互いに語り合い、ヴァルデマルが「死んでも真夜中にさまよい歩くことになる」と不安をもらしても、トーヴェは、東の間の死によって永遠の愛や美への浄化がもたらされると語り、黄金の盃で乾杯する。しかし、嫉妬に燃える王妃ヘルヴィヒに謀られ、トーヴェは毒殺されてしまう。森鳩はそれを「王はトーヴェの棺を開き、唇を震わせてじっと見つめ耳を澄ますが、彼女は沈黙したままだ！」と伝える。

**第2部**：ヴァルデマルは、運命の残酷さを呪い、トーヴェの死に対する悲しみから神を非難する。そのかどで命を失ったヴァルデマルは、死者の霊となって、毎夜、家来たちを引き連れ、グレの城の周辺を狩をしながらさまよう。  
**第3部** 荒々しい狩：ヴァルデマルが家来たちとともに出発する様子を目にした農夫は驚き、「大急ぎで3本の十字架を作ろう」と言って身を守る。一方、家来たちは「最後の審判の日まで毎晩

れ動く。静寂のなかで情感が漂う音楽。  
 “今 黄昏に海も陸も” 黄昏の訪れと静まりゆく森の様子とともにヴァルデマルの心の落ち着きが語られる。弦楽器の半音階の下行が印象的である。  
 “月の光が淀みなくそそぎ” ヴァイオリン独奏に始まる甘美な旋律を背景に、トーヴェが月夜の美しさを歌う。オーケストラによる後奏では、最弱音から最強音へと高まり、変ト長調からホ長調に転調する。  
 “馬よなぜこうも遅い!” 付点のリズムでグレの城に馬で向かうヴァルデマルの、はやる心が描かれる。打楽器も加わり、トーヴェの姿を見つけた最後で、音楽は劇的な高まりをみせる(愛の動機)。  
 “星は歎びの声をあげ輝く海は” ワルツ風の3拍子のリズムにのって、トーヴェも恋する気持ちを表現する。  
 “天使たちの舞も” グレの城を前にして、トーヴェとの愛は天使たちが踊る天上の喜びにも勝ると歌う(ヴァルデマルの主題)。懐の深い、ゆるやかな音楽。  
 “今初めて告げる” クラリネット独奏の旋律に導かれ、静かに想いを伝える(トーヴェの主題)。  
 “真夜中だ” 不気味な夜の情景が、チェロによって死の予感をもって描かれる。愛の陶酔と交錯するヴァルデマルの心中が描かれる。中間部は二短調から二長調に転じ、愛の至福が不安を凌駕する。  
 “あなたは私に愛の眼差しを向け” ト

紙のなかでも、オーケレーションのスタイルが異なることや、道化師クラウスや最後の合唱の部分で整合性を持たせるための「これらの修正は、私にとって全曲を作曲したときよりも大きな苦労だった」と告白している(1913年1月24日)。実際、第3部の「農夫の歌」以降は、後期ロマン派の延長上にある重厚な響きは後退して、個々の楽器の音色を生かし、色彩の豊かさが前面に出てくる。さらに、終結部の語りにはシェーンベルクが〈月に憑かれたピエロ〉(1912)で究めることになる語りと歌の中間の唱法「シュプレヒゲザング」が、先取りするかたちで現れる。  
 このようにシェーンベルクの二つの創作期の特徴を備えた〈グレの歌〉は、1913年にウィーンでフランツ・シュレーカーの指揮で初演された。これまで数々の作品でスキャンダルを起こしてきたが、この作品は聴衆に好意的に受け入れられ、大成功を収めた。  
**第1部**：日没と夕闇の訪れを描く序奏に続いて、ヴァルデマル王とトーヴェが交互に愛の憧れと成就を歌う。二重唱にはならないが、ワーグナーの〈トリスタンとイゾルデ〉との類似性は明らかである。  
 序奏 フルートとピッコロのまばゆく「ゆらぐ光」の動機、トランペットやホルンの穏やかな「日没」の動機が現れる。これらは変ホ長調の付加6度の主和音(変ホ、ト、変ロ、ハ)の響きのなかで揺

が務める)、3組の男声四部合唱と混声八部合唱、そして巨大な編成のオーケストラによる、かつてない規模の、伝統の究極的な総合とも言える作品となった。  
 〈グレの歌〉のテキストは、ヤコブセンが1860年代後半に書いた小説『サボテンの花開く』に含まれる叙事詩である。5人の若者が、サボテンの花が開く瞬間を待つことを口実に軍事顧問官の家に集まり(本当はその家の美しい娘が目当てなのだが)、そこで登場人物が朗読する詩のひとつとして書かれた。シェーンベルクは、これを詩人の死後、1899年に出版されたロベルト・フランツ・アルノルトによるドイツ語訳の全集で知り、まずはその詩をテキストにピアノ伴奏の歌曲を3曲書いた。それだけでは満足できず、オラトリオのようなものにしようとして構想をふくらませ、〈グレの歌〉の作曲が始まった。1900年3月もしくは4月までに第3部までの大部分を完成させ、翌年3月には全体を書き上げ、8月からオーケストレーションに取りかかった。ただ、当時のシェーンベルクは、作曲に専念できるほど暮らしが豊かではなく、オペレッタの編曲や指揮等で生計を立てていたため、作業は中断をはさんで続けられたが、1903年を最後に途絶えた。  
 1910年7月に仕事は再開されるが、シェーンベルクの創作も、1908年から無調に移行したことで、作風は大きく転換した。弟子のベルクに宛てた手

狩をするのだ」と雄叫びをあげる。ヴァルデマルは、死によってさらに深まるトーヴェへの愛を込めて彼女の名を繰り返し、トーヴェの魂もヴァルデマルを愛し続ける。死者の霊とともに狩を続けさせられる道化師クラウスの心情が語られた後、ヴァルデマルに最後の審判が下される。王の罪はトーヴェの愛によって贖われ、その魂は救済された。  
 夏風の荒々しい狩：夏風は蜘蛛の網を破り、蝶や蛙に脅威を与えながら草原を走り、それが吹き止むと平和な静けさが訪れる。生命の救済が暗示された後、太陽が再び昇り、輝かしい朝の到来が高らかに告げられる。

### ● 楽曲について ●

シェーンベルクは、20世紀の音楽の方向を定め、現代音楽に決定的な影響を与えた作曲家である。無調という新たな地平を開き、12音技法を創始したことで知られるが、彼の出発点は、ブラームスやワーグナーの音楽にあった。  
 世紀転換期のウィーンに生まれたシェーンベルクは、専門的な音楽教育を受けず、仲間たちとの合奏やアマチュア・オーケストラでの演奏を通じて音楽に親しみ、独学で作曲を開始した。ワーグナーの影響を色濃く残しながらも大胆な〈浄夜〉(1899)で保守的なウィーンの聴衆を驚かせ、続いて手がけた〈グレの歌〉は、5名の独唱者とひとりの語り(本公演ではバリトンと語りは同じ歌手

## 3.19 [火]

沼野雄司 (ぬまの ゆうじ)・音楽学、桐朋学園大学教授

ヴァレーズ  
オクタンドル

作曲：1923年／初演：1924年1月13日、ニューヨーク／演奏時間：約7分

フランスに生まれ、のちにアメリカに帰化したエドガー・ヴァレーズ(1883～1965)の創作全体を見通した時、大きく二つの柱があることがわかる。ひとつは新しい音響の希求。彼は生涯にわたって「これまでに存在しないような音」を求めて、さまざまな楽器の可能性を開拓するとともに、電子テクノロジーの発展を自作に生かそうと試み続けた。そしてもうひとつが、古代や秘境的なエキゾチシズムへの志向である。いわば「未来」と「古代」という真逆の遠方へと、彼のまなざしは注がれていたわけだ。

1923年に作曲された〈オクタンドル〉は、後者の側面がより強くあらわれた作品。曲全体を貫くのは、どこかエロティックで熱帯的ともいえる媚態だが、これは〈オクタンドル(8つの花卉を持つ花)〉というタイトル、そして彼としては珍しく打楽器セクションを含

まない編成によくあらわれている。コントラバスの低音の上で7本の管楽器が咲き乱れるというのが、おそらく基本的なアイデアなのだろう。ちなみに初演は大不評で、「下品な騒音の爆発」などと評されてしまった。全体は続けて演奏される3楽章からなる。

第1楽章、まずはオーボエの旋律がミステリアスな気分を提示。この主題が他楽器に受けわたされた後、ほどなくするとホルンを軸にしたリズムユニゾンによる無骨なマーチがあらわれる。第2楽章では、途中で針が滑ったレコードのように、同じような音型を何度も反復する部分が面白い。時に「凍った音楽」とも呼ばれるこの特異な音風景は、一度聴いたら忘れられないはず。第3楽章は、ヴァレーズとしては珍しくフーガ的な趣向が凝らされた音楽。しかし、最後には彼独特のエネルギッシュな音の爆発に到達する。

ーヴェの最後の歌は、死によって二人の愛は永遠になると歌う。〈トリスタン〜〉の響きを想起させ、余韻が広がる。“不思議なトーヴェよ” ヴァルデマルの満たされた心が歌われる。間奏 二人は愛の陶醉に浸る。これまでの動機が組み合わされ、最後に急転し、木管の切ない旋律がトーヴェの死を暗示する。

森鳩の声“グレの鳩たちよ” 第1部で最も長大な曲。メゾ・ソプラノがしめやかに歌い進め、吊いの鐘が鳴り響く。劇的な音楽で、全体の構成としては第3部の語りの部分に対応している。第2部：ヴァルデマルの激しい感情が込められた“神よ何をなされたかご存じか？” 1曲だけで構成される。森鳩の歌、トーヴェの主題、ヴァルデマルの主題などが再現された後、神を非難する絶望の歌となる。

第3部 荒々しい狩：最後の審判の日まで狩の雄叫びをあげなければならないヴァルデマルの夜行が描写される。“目覚めよヴァルデマル王の臣下たちよ” 第1部の“真夜中だ”の動機で始まり、5本のチューバ(うち4本はワーグナーチューバ)の旋律から幽鬼の狩猟に出發する力強い歌となる。ホルン10本のユニゾンは迫力がある。

“棺の蓋が音を立てて跳ね上がる” 農夫は亡霊たちの姿に恐れおののく。中間に亡霊の兵士の掛け声が。

“王よグレの岸辺によくこそ！” 3組の男声合唱の掛け合いで荒々しく歌われる。全曲で最も複雑で、対位的書法が効果を上げている。

“森はトーヴェの声で囁き” ヴァルデマルのトーヴェへの思慕が切々と語られる。第1部の愛の動機が現れる。

“奇妙な水中の鳥の正体はウナギ” 嫌々付き合わされる道化クラウスの嘆きは、滑稽だが、グロテスクな表情も見せる。

“天の厳格な裁き手よ” トーヴェとの愛を再び訴える。金管楽器が最後の審判を暗示する。

“雄鳥が頭をもたげ今にも朝を告げようとしている” 男声合唱が夜明けが近いと知らせる。

夏風の荒々しい狩：繊細な響きの序奏を経て、自然描写へと移行する。

“アカザ氏にハタザオ夫人よ” 語りが独特の唱法で、生き生きと自然を描写する。ヴァルデマルとトーヴェの名前は出てこないが、二人の主題が現れる。“見よ太陽を！” 混声合唱が、朝の到来の喜びを告げる。ハ長調の響きが大きく広がり、輝かしく結ばれる。

楽器編成／フルート8(ピッコロ持替)、オーボエ3、イングリッシュ・ホルン2、クラリネット3、エスクラリネット2、バスクラリネット2、ファゴット3、コントラファゴット2、ホルン10(ワーグナーチューバ持替)、トランペット6、バストランペット、トロンボーン7、チューバ、ティンパニ2、打楽器(大太鼓、小太鼓、テナードラム、シンバル、トライアングル、チェーン、グロックンシュピール、ラチェット、シロフォン、銅鑼)、ハープ4、チェレスタ、弦五部、独唱、合唱

楽器編成／フルート(ピッコロ持替)、オーボエ、クラリネット(エスクラリネット持替)、ファゴット、ホルン、トランペット、トロンボーン、コントラバス

## メシアン 7つの俳諧

作曲：1962年／初演：1963年10月30日、パリ／演奏時間：約23分

1962年夏、オリヴィエ・メシアン(1908～92)は新婚旅行と仕事を兼ねた旅先として日本を選んだ。歓迎ムードに沸いた東京では、小澤征爾の指揮による〈トゥーランガリラ交響曲〉日本初演や、メシアンと夫人でピアニストのイヴォンヌ・ロリオの二重奏をはじめとする多くの演奏会が開催されたのに加えて、FMでも連日のように、このフランスの大家の作品が放送された。一方のメシアンも山中湖、軽井沢、奈良、宮島などを訪れ、日本の風物に強く惹きつけられることになる。この、なかなか幸福な出会いの中で生まれたのが〈7つの俳諧：日本の素描〉(1962)である。

**第1曲**“導入部”は、インドのリズム理論を基盤にした序奏。ピアノと木管が一種のカノンを形成する背景で、金属打楽器が鳴り響く。

**第2曲**“奈良公園と石灯籠”は、クラリネットが主導する中、シロフォンとマリンバが装飾的に絡み合う。メシアンは牡鹿と牝鹿が歩き回る様子、そして連綿と連なる石灯籠にいたく感銘を受けたと述懐している。

**第3曲**“山中湖～カデンツァ”はピアノ独奏を中心にしながら、日本の鳥であるキビタキ、ホアカ、ヒバリ、クロツグミの声が導入される。

**第4曲**は“雅楽”来日時にメシアンは皇居で雅楽を聴いた。この曲ではトランペットで箏、弦楽器で笙が模倣されながら、メシアン的としかしいような架空の雅楽があらわれる。

**第5曲**は“宮島と海中の鳥居”面白いことに、メシアンが宮島で感じ取ったのは雅やかな日本ではなく、青い海と赤い鳥居の鮮やかな対比だったという。彼はこの色合いに、さらに「灰色、金色、オレンジ色、薄緑色、銀色」を加えたと述べている。

**第6曲**“軽井沢の鳥たち”は、もっとも大規模な音楽。ここでは、実際にメシアンが軽井沢で採譜した鳥の声が次々にあらわれる。ウグイス、ホトトギス、キビタキ、オオルリ、アオジ、サンコウチョウ、クロツグミ、メジロ……。

**第7曲**“コーダ”は、冒頭の“導入”と対になる短い音楽。かくして日本の印象は、なにやら異教的な雰囲気の中で幕を閉じるのである。

楽器編成／フルート、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、エスクラリネット、バスクラリネット、ファゴット2、トランペット、トロンボーン、打楽器(トライアングル、シロフォン、マリンバ、クロティル、鐘、チャイニーズシンバル、ターキッシュシンバル、ゴング、銅鑼)、ヴァイオリン8、ピアノ独奏

## シェルシ 4つの小品

作曲：1959年／初演：1961年12月4日、パリ／演奏時間：約18分

イタリア出身のジャチント・シェルシ(1905～88)のような形で「再発見」された作曲家も珍しい。

ほぼ晩年にいたるまで、さして注目される存在ではなかったものの、フランスの若い作曲家たちが自らのルーツのひとつとしてシェルシの音楽に言及したこと、1988年に死去したこと、さらにはそれに続く「盗作疑惑」(作曲にあたって、後輩作曲家に様々な形で助力を得ていた)などをきっかけにして、一気に彼の名前は知られるようになり、90年代にはちょっとした「シェルシ・ブーム」が起こったのだ。実際、シェルシの音楽が持つ強烈な個性は、音楽史の中でも類をみないものといえる。

彼の作風を代表するのが、この〈4つの小品〉(1959)である。なにしろ、4つの曲はそれぞれ、基本的にひとつの音高のみ(!)で構成されているのだ。具体的にいえば、第1曲はファ、第2曲はシ、第3曲はラ、第4曲はラという音だけが鳴り響く(もっとも、正確に言えば、これらの音は時として半音より狭い音程で微細に上下する)。それでは単調になってしまうだろうと思

いきや、しかし実際に耳にすると意外なほどに豊穡な音楽なのである。

鍵はふたつある。まずは各楽器の倍音特性のちがひ。つまり同じ「ファ」の音であっても、弦楽器とトロンボーンでは音色が全く異なる。おそらくはそうした差異を際立たせるために、この曲ではイングリッシュ・ホルンやテナーサクソフォン、チューバなど、あえて倍音を多く含む楽器が用いられており、それらの微妙な音質の差によって、バラエティー豊かな音響が生み出されている。もうひとつは細かい音型の組み合わせの妙。たとえば第1曲の冒頭では、クラリネット、ホルン、トランペットがファ音を長い音価で奏する中、チェロはファ音の周りを細かいトレモロで装飾する。やがてホルンのゲシュトップ奏法(右手をベルの中に差し込み音程を変化させる)が導入され……といった具合に、常に曲中を通じて響きの重ね方や奏法が変化していくのである。

ちなみにこの曲は、その微妙な音色に決定的な生命があるために、CD録音ではどうしても魅力が半減してしまう作品でもある。本日の演奏は貴重な機会といえよう。

楽器編成／アルトフルート、オーボエ、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット、アルトサクソフォン(テナーサクソフォン持替)、ホルン4、トランペット3、トロンボーン2、チューバ、ティンパニ、打楽器(フレグサトーン、ボンゴ、コンガ、タンブリン、銅鑼、サスペンデッドシンバル)、ヴィオラ2、チェロ2、コントラバス

## グリゼー 〈音響空間〉から“パルシエル”

作曲：1975年／初演：1976年3月4日、パリ／演奏時間：約18分

フランスの作曲家ジェラルド・グリゼー（1946～98）は、学生時代にはメシアンらの薫陶を受けて曲を書き始めるものの、やがて先のシェルシの音楽に決定的な影響を受けながら、自らの作風を確立していくことになる。彼の作風はしばしば「スペクトル楽派」と呼ばれるが、これはひとつの音の中に潜んでいる倍音を、積極的に作曲の要素として考える姿勢を指している。

倍音、というのは弦や空気柱の部分振動である。たとえば低いド音を鳴らした際に、実はその上にドーソードミーソーシ…と続く「倍音列」が鳴っており、これらの倍音の様態が楽器の音色や質感を決定する。グリゼーが目をつけたのは、普段は陰に隠れている、こうした倍音の存在だった。

彼の方法論が、もっとも分かりやすく示されているのが、6曲からなる大作〈音響空間〉の第3曲にあたる、この“パルシエル”である。スペクトルや倍音というと、何やら難解な雰囲気になってしまうけれども、18分ほどを要するこの作品の効果は、むしろ単純明快といってもよい。

まず、曲頭でくさびのように打ち込まれるのが、コントラバスによる低いミの音。そして、そこにふわりと弦楽器や管楽器が上方倍音を乗せてゆく。ここで聴くことができるのは「長三和音」などとは異なる、より本質的な意味での協和音である。ひとつの音を顕微鏡で拡大した時、ほかの様々な音が見えてくるような感覚といったらよいだろうか。

倍音のたゆたいは、徐々に響きの焦点を高音へと移動させながら、次々に新しい風景を提示し始める。たとえば曲の半ばでは、微分音をふんだんに用いたヴァイオリンのやりとりに管楽器が混じり、グロテスクに歪んだ音像があらわれるといった具合。終盤にいたって曲は究極の倍音、すなわちテレビの「砂嵐」のような白色雑音へと近づいてゆくが、その後に驚くような趣向が待っている。ここではノイズという現象が拡大解釈されて、奏者たちが真の「雑音」を奏で始めるのだ。これは実際に見ていただくよりほかないのだが、実に秀逸なアイデアといえよう。最後は打楽器奏者へとスポットライトが集約されて……。

楽器編成／フルート2（ピッコロ、アルトフルート持替）、オーボエ、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2（エスクラリネット持替）、コントラバスクラリネット、バスクラリネット、ホルン2、トロンボーン、打楽器（大太鼓、シンバル、スリットドラム、グロッケンシュピール、ヴィブラフォン、ゴング、銅鑼、トムトム、ライオンズロア、サンドペーパー、鳥笛）、アコーディオン、ヴァイオリン2、ヴィオラ2、チェロ、コントラバス

3.23 [土]

3.24 [日]

柴田克彦（しばた かつひこ）・音楽ライター

## ベルリオーズ 歌劇〈ベアトリスとベネディクト〉序曲

作曲：1860～62年／初演：1862年8月9日、バーデン・バーデン／演奏時間：約8分

今年没後150年を迎えたフランスの革命的作曲家エクトール・ベルリオーズ（1803～69）が残した、〈ベンヴェヌート・チェッリーニ〉〈トロイアの人々〉に続く3本目のオペラの序曲。当オペラは、彼が完成した最後の作品（後に編曲物あり）でもある。

1860年、バーデン・バーデンの音楽祭に赴いたベルリオーズは、音楽祭を主宰するエドワール・ベナツェから、新しい劇場のためのオペラを依頼された。彼は自ら台本を書いて本作の作曲を進め、1862年2月に完成。同年8月に作曲者自身の指揮で初演され、成功を取めた。だが、パリでの初演は没後の1890年まで実現しなかった。

オペラ自体は、シェイクスピアの『空騒ぎ』を題材にした全2幕の喜劇。愛し合いながらも素直になれず、喧嘩ばかりしているベアトリスとベネディクトが、周囲の人々の策略によって結

ばれるといった物語である。

序曲は、本編の旋律を用いた、喜劇の開幕に相応しい作品。作曲者一流の精妙なオーケストレーションが光っている。曲は、アレグロ・スケルツァンド、3/8拍子で軽快に開始。この旋律は本編フィナーレの小二重唱のバックに流れる音楽である。次いでアンダンテ・ウン・ポーコ・ソステヌートの叙情的な部分に入り、半音階の下行を伴う主題が示される。これは第2幕前半のベアトリスの愛のアリア。そして最初の主題がアレグロ、2/2拍子で再登場し、二つの主題を軸にした軽妙で活気溢れる音楽が続いていく。

今回はカンブルランの読響常任指揮者としての最終公演。鬼才ともいえる彼が、自国の鬼才ベルリオーズの最後の作品——しかも、後半の〈幻想交響曲〉の女優スミッソン絡みのシェイクスピア物——を冒頭に置いたのは、なかなか意味深い。

楽器編成／フルート、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、コルネット、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

# ベートーヴェン ピアノ協奏曲 第3番 ハ短調 作品37

作曲：1796～1803年／初演：1803年4月5日、ウィーン／演奏時間：約34分

1792年に生地ボンからウィーンに移ったルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)は、まずピアノと作曲双方の腕前を認められるピアノ協奏曲の創作に<sup>いそ</sup>勤しんだ。その結果、1795年頃にモーツァルト踏襲型の第1、2番がウィーン移住後の名作の中では最初に誕生した。そして、第3番でこれまでにないドラマティックな世界に移行。協奏曲のジャンルに新境地をもたらした。

本作は、1796年の構想開始から7年後の1803年に完成され、同年4月にアン・デア・ウィーン劇場で初演された。このときベートーヴェン自身が弾いたピアノの譜面には、音符ではなくエジプトの象形文字のような記号が記してあったと伝えられている。

大きな特徴は、ベートーヴェンの全協奏曲の中で唯一の短調作品であり、しかも〈運命〉交響曲や〈悲愴〉ソナタ等と同じハ短調を基調としている点。この調性が劇的な曲想の源になっている。ダイナミックかつこまやかなピアノリズムも当時としては破格。その点は、楽器自体の急速な進歩に後押しされている。ベートーヴェンは、1803

年8月にフランスのエラール社から最新ピアノ(鍵盤と弦の数が増えた)を寄贈され、1804年7月の本作再演にあたって、弟子リースがソロを弾くために独奏パートを初めて譜面に記した。当然、そこには新楽器の音域や重厚な響きが反映されており、終楽章には従来出せなかった4点ハ音も登場する。さらには、オーケストラとソロが一体化した展開も清新な特徴。ソリストの名人芸が最優先だった協奏曲に導入されたこの交響曲的な音楽は、後世に多大な影響を与えた。

**第1楽章** アレグロ・コン・ブリオ 重々しい第1主題と明るめの第2主題を軸に運ばれる力強い音楽。カデンツァはベートーヴェン自身の作が残されている。

**第2楽章** ラルゴ 叙情的、幻想的な<sup>かんじよ</sup>緩徐楽章。主調のハ短調と共通音がほとんどないホ長調で書かれている点が斬新であり、これが異世界へと導く。

**第3楽章** ロンド、アレグロ ハ短調ながらも快活なフィナーレ。冒頭に奏される軽快な主題を軸に進行。最後はプレストに変わり、ハ長調で明るく終結する。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

# ベルリオーズ 幻想交響曲 作品14

作曲：1830年／初演：1830年12月5日、パリ／演奏時間：約49分

ベルリオーズ初の成功作にして、ベートーヴェンの死のわずか3年後に書かれた革新的な交響曲。1827年、パリ音楽院に学ぶ彼は、英国から来たシェイクスピア劇団の女優スミッソンに無謀な求愛をして失恋する。そして1830年、ベートーヴェンの交響曲やゲーテの『ファウスト』(第5楽章は同作の場面と合致)の影響のもと、失恋の恨みを込める形で本作を完成した。

曲は、「ある芸術家の生涯のエピソード」の副題と、全体及び各楽章に標題をもっている。全体の標題は「失恋した芸術家がアヘンで自殺を図るが、死に至らず、昏睡状態で奇怪な幻想を見る。その中で恋人はいつも決まった旋律として現れる」。この“標題交響曲”の発想と、恋人の旋律が全楽章に登場する“固定楽想”の手法は、ロマン派の音楽に大きな影響を与えた。

交響曲としては画期的な楽器用法も特徴。例を挙げると、第2楽章…2台のハープ、第3楽章…イングリッシュ・ホルンと舞台裏のオーボエ、4人で叩くティンパニ、第5楽章…エスクラリネット、2本のチューバ、舞台裏の鐘など。

楽器編成／フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2(イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット2(エスクラリネット持替)、ファゴット4、ホルン4、トランペット2、コルネット2、トロンボーン3、チューバ2、ティンパニ2、打楽器(大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、小太鼓)、ハープ2、バンダ(オーボエ、鐘)、弦五部

以下、「」内は標題の要約。  
**第1楽章** “夢と情熱” 「恋人に巡り会う前の不安と憧れ。やがて恋人に出会う」。情熱と不安が同居した音楽。固定楽想はフルートとヴァイオリンで流麗に奏される。

**第2楽章** “舞踏会” 「舞踏会で見え隠れする恋人の姿」。当時異例のワルツ楽章。

**第3楽章** “野の情景” 「夏の夕べ。二人の牧童の笛、かすかな希望。裏切りへの不安。遠雷、静寂」。孤独感と静寂感が支配する緩徐楽章。

**第4楽章** “断頭台への行進” 「嫉妬に狂って恋人を殺害した芸術家は、死刑を宣告され断頭台へ」。壮絶な行進曲。

**第5楽章** “ワルブルグスの夜の夢” 「埋葬に集う魔物たち。恋人は下品な笑いを浮かべている。『怒りの日』(グレゴリオ聖歌)が鳴り響き、狂宴はクライマックスとなる」。狂乱のフィナーレ。

常任指揮者カンブルランのラスト演目。彼は「数度演奏し、初のCD録音も行った『幻想』では、読響の変化を明示できる。ただ、お決まりの解釈ではなく新しい何かを提供したい」と語っていたので、期待も大きい。